

早稲田大学 文化構想学部 世界史 講評

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	2011年以降すっかり定着した感のある古代から順次時代を降って現代にいたる大問配列は今年も踏襲された(2007年～2010年は「人の移動」(2007)・「都市」(2008)・「戦争」(2009)・「思想・宗教」(2010)と全体を通じたテーマ設定がされていた)。また史料問題・図版を用いた絵画史といった出題も変化はなかった。第一・第二文学部の再編直後は易しい出題が目立ったものの次第に難化してきたが、本年度に限ると昨年に比べ易化した。大問は7と昨年の8問から減ったが、小問の総数は42問と同じだった。2019年40問、2018年42問、2017年40問と40問と42問を反復している。それ以前は、2016年43問、2015年44問、2014年43問、2013年44問、2012年、43問と1問のプラス・マイナスを繰り返している。昨年姿を消した論述問題は復活しなかった。

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
〔Ⅰ〕	古代オリエント世界の統一	2020年「人類の進化」・2019年「西アジアの古代文明と文化」・2018年「世界遺産に指定された遺跡」・2017年「古代社会における神と権力」と続いて今年アッシリアとアケメネス朝。昨年に比べ大幅に易化。設問1:「もっとも早く鉄器を使用」は語群中からは迷わず「ヒッタイト」選択となる。仮に記述式だとヒッタイトに先行するハッティなどのアナトリアの民族が正解となる。設問2:「アッシュル＝バニパル」と設問3:「イ図書館」は易しい。設問4:「ア」が誤文。「地域に重税」「強制移住など圧政」はアッシリアに該当。設問5:正解はウ。アはペルセポリス碑文のこと。ベヒストゥーンはイラン西部で現在ではイラク国境に近い地点。イのヴェントリスはエーゲ文明の線文字Bの解読者。エは事実無根の内容。	易
〔Ⅱ〕	ローマ建国神話とトロイア	設問1:正解はエ。ア-ホメロスが古典ギリシア最古期で実在すら定かでないことを考えればサッフォーと同時代でないことはすぐわかる。イ-オデュッセイアがギリシアに帰還する途中で災難にあうのだからトロイア方でないことは自明。ウ-『イリアス』では要所要所に神々が登場する。『オデュッセイア』の発端も海神ポセイドンの怒りにあった。人間の運命は神々によって定められているので、人は結果ではなく如何に生きるかによってその価値が決まる、そう古代ギリシア人は認識していた。設問2:正解はウ。コンスタンティノープル(ビザンティウム・イスタンブル)はボスフォラス海峡の西側に位置。トロイはダーダネルス海峡の東側である。エの「ガリポリ」は戦史マニア以外には細かいがエの誤りが明白なのでこだわる必要はない。設問3:『アエネイス』の作者ヴェルギリウスがオクタウィアヌス(アウグストゥス)の保護を受けたことは重要。『アエネイス』は昨年につづいての出題。逆に抑圧されたのが『変身物語』の作者オウィディウスである。設問4:東ゴートの都が置かれたのはラヴェンナ。東ゴートを滅ぼしたユスティニアヌスはラヴェンナに総督府をおいてイタリアを支配した。設問5:ギリシアとローマの神々の対照。よく資料集などに出てくるがいきなり聞かれると厳しい。正解はイ。エの「ウラノス」は一般的ではない。	一部難

番号	出題内容	コメント	難易度
〔Ⅲ〕	新羅・高麗時代の朝鮮と北・東アジア世界	設問1：渤海(698～926)の建国者は大祚榮。統一新羅(676～935)と渤海はほぼ同時代の存在であることは重要。渤海と統一新羅をセットにして朝鮮(+中国東北)の南北朝時代ととらえる見方も有力。この両者と密接な関係を維持したのが奈良時代(710～794)・平安時代(794～1185)前半の日本であった。設問2：正解はエ。唐の冊封体制下、日本は貢物のみを不定期に携えて朝貢する「入蕃」であった。同様の朝貢はベトナム中部の林邑も行っていた。設問3：正解は仏教。設問4：正解はイ。高麗の都と建国者は基礎事項。設問5：正解はイ。ア-契丹文字には漢字をベースにした大字とウイグル文字系の小字があった。ウ-女真文字に影響を与えたのは西夏文字ではなく契丹文字。エ-仮名文字の成立は8世紀末、仮名文学が発達するのは10世紀。東アジア文化圏の指標として受容した仏教も、国風文化の流れのなかで浄土教が独自の発達を遂げることも重要。	標準
〔Ⅳ〕	イスラーム勢力のインド進出	昨年の大問Ⅳ「イスラーム世界におけるトルコ系見民族の展開」と同系統のテーマ設定。設問1：正解はイ。西ゴート征服は711年でウマイヤ朝(661～750)時代の事件。ア-ビザンツ帝国制服は1453年(メフメト2世)は基礎事項。ウ-トウルポワティエ間の戦い(732)はカール=マルテル率いるフランク軍が勝利。エ-タラス河畔の戦い(751)はアッバース朝成立(750)直後。設問2：正解はエ。アのガレオン船はスペインの帆船。ムスリム商人がインド洋で用いたのはダウ船。イ-カーリミー商人を保護したのはアイユーブ朝(1169～1250)とマムルーク朝(1250～1517)。ウ-キルワ以下の都市はアフリカ東岸。設問3：サーマーン朝、ロディー朝何れかがわかれば正答できて易しい。設問4：正解はクトゥブミナル。早大文系学部では過去に何回も出題されている。設問5：正解はエ。マラーター王国(17世紀中頃～1818)の成立はムガル帝国(1526～1858)時代。設問6：正解は『バーブル=ナーマ』。設問7：正解はア。イ-タージ=マハルはデリーではなくアグラに造営された。ウ-アウラングゼーブは「人頭税(ジズヤ)を復活」が正しい。エ-ムガル帝国はシパーヒーに擁立された皇帝バハドゥル=シャー2世が英に捕えられビルマに配流されて滅亡した。	標準
〔Ⅴ〕	ロシア革命とロシア皇帝	ロシア革命に関する史料問題。昨年の大問Ⅶ「トルーマン=ドクトリン関係史」の後継問題。昨年の大問Ⅴは「オーストリア継承戦争関係史」。一見すると別テーマだが、設問の一部は昨年とかぶっている。設問1：正解は「四月テーゼ」。「すべての権力をソヴィエトへ」で知られるレーニンの演説。史料文だけだと不安になったかもしれないが、設問2：アの「リヴォフ」で確証が得られる。リヴォフは二月(三月)革命でニコライ2世が退位したあと臨時政府で首相を務めた人物。七月蜂起後にケレンスキーにかわった。単独では難しい人物だが消去法で対処できる。設問3正解はイ。設問4：正解は「全ロシア=ソヴィエト会議」。1917年11月6日(露暦10月24日)のボリシェヴィキ蜂起の翌日に第2回会議が開催され「平和に関する布告」「土地に関する布告」を発表。	やや難

番号	出題内容	コメント	難易度
〔V〕		レーニンを議長とし立法・行政についての直接権限を有する人民委員会議を選出した。設問6:「ソヴィエト」は空欄で繰り返し登場しており易しい。設問7:正解はイ。ピョートル1世のバルト海派遣獲得は北方戦争(1700~21)の勝利による。ピョートル3世(位1762)は七年戦争(1756~63)中の1762年に即位し、ただちに交戦中であったプロイセン(フリードリヒ2世)と講和し同盟を結んだ。その直後の宮廷クーデタで失脚しエカチェリーナ2世が即位する。エカチェリーナ時代の国際情勢は昨年の出題テーマと重なる。	
〔VI〕	辛亥革命と中国周辺諸国の動静	昨年の大問VIは「18~19世紀のアジア海域世界」で中国に関しては今年はその少しあとの時代を対象とする。設問1:空欄への列強の国名補充は易しい。設問2:①の国はチベット。本文は中華民国・英・チベット政府によるシムラ会議(1913~14)についての説明。エの空欄Bは「ダライ=ラマ14世」で亡命先はインド。設問3:②の国はベトナム。正解のイはファン=ポイ=チャウが主導したドンズー(東遊)運動についての説明。設問4:③の国はモンゴル(外モンゴル)。正解のウはノモンハン事件(1939)の説明。ア:外モンゴルに清朝の支配が及んだのは1691年。エ:1962年にクーデタがおきて軍事政権が成立したのはビルマ。	やや難
〔VII〕	19世紀仏の絵画と社会	昨年の大問VIIは史料問題「トルーマン=ドクトリン関係史」だったが、今年は大問が1問減って最後尾の絵画史が大問VIIとなった。2020年「19世紀仏の絵画と社会」、2019年「西洋の美術」、2018年「9世紀後半から20世紀にかけての前衛芸術」と続いたがテーマ設定は昨年と似たものとなった。設問1:「ハイネ」とあるので正解は「ロマン」主義。設問2:資料としてあげてあるのはプッサンの「夏」。受験世界史とは縁遠い存在だが、解答はルイ13世の宰相を問うているだけで易しい。設問3:「プッサンと同時代」の画家を選択するが正解のイ「ベラスケス」一本釣りはやや難しい。設問2でルイ13世が示されているからウ「ワトー」はルイ15世時代なので除外。デューラーはルネサンス、ダヴィドはナポレオン時代なので消去法でも正解できる。設問4:資料としてテオドール=ルソーの「フォンテーヌ=ブローの森のはずれ、夕日(日没)」があげてあるがこれも解答にはなんら関係ない。「16世紀にはイタリアから」でエ「ルネサンス美術」を即答できる。設問5:「農民たちの日々」からミレー、「印象派を確立」からモネを簡単に連想できる。昨年はマネ「草原の食事」が出題。設問6:モリス(ウィリアム=モリス)の作風を「イギリスだけでなく、ベルギーやフランスなど大陸でも19世紀末にかけて流行…自然界に見出せる曲線や有機的な形態を取り入れた様式」として問う。設問1~5までは易しかったがこの設問6だけ突出した難問となっている。記述式なので消去法などテクニックも通用しない。正解は「アール=ヌーヴォー」。これは2018年にも出題されている。モリスは中世の職人芸に感銘を受け主として室内装飾に取り組んだ。彼は「モダンデザインの父」とも称されるので解答は「モダンデザイン」も可。	標準

[総合コメント]

古代から始まって、中世、近代、そして現代へと出題するパターンはそのまま踏襲された。昨年消えた地図問題と短い論述問題は復活しなかった。昨年、論述がこのまま消滅するのではないかと予想したがその通りになった。仮に来年復活したとしてもかなり短いかいものとなるのではないだろうか。昨年引用が目立った歴史学研究会編『世界史史料』は今年は『西洋史料集成』(1990)にかわった。できることなら一度手に取っておくべきだが、なにしろ30年前の本なので新しい図書館にはないだろう。史料問題対策としては引き続き『世界史史料』を参照すべきである。『世界史史料』も『西洋史料集成』も大学生以上を対象とする書籍だが、受験生も参照しておく価値はある。高校教科書に書いてある内容のひとつひとつがどのように史料で裏付けされているかがわかり、ともすると単純な暗記に走りがち(これは退屈でもある)な受験勉強に刺激を与えてくれる。最後尾の絵画史問題、今年のような設問だと絵画そのものを見知っておく必要は全くない。しかし用心にはこしたことはないので教科書に載っているものに加えて図説類で補強しておいた方がいい。「アール・ヌーヴォー」のような語彙は一般教養として持っているかどうかということ。美術に興味の持っていた受験生は拾い物をしたことになる。一般教養は短期の受験対策では対応不可能なので、特別な対応は必要とされない。受験対策は通常の出題範囲(教科書・用語集・地図・年表・問題集など)に注力すべきである。この「アール・ヌーヴォー」といい『アエネイス』や「エカチェリーナ2世」のように続けて出題されるケースが目立つので過去問は徹底的に研究しておくことが必要である。